令和５年度「地域でつながる家庭教育応援事業」

家庭教育支援者地区別研修（会津地区）親子の心のかけ橋づくり

＜日　時＞　令和５年７月２７日（木）１３：３０～１６：３５
＜場　所＞　会津若松市北会津公民館
＜参加者＞　４３名（家庭教育支援者・学校関係者等３６名、講師２名、事務局５名）

講演「不登校を支援する」～命を見つめて～
ＮＰＯ法人こおりやま子ども若者ネットワーク
副理事長　大岡　桂子　様

（１）不登校を通して考えたこと

子どもが不登校になった時は、強制的に登校させた。学校に行かせなければならないと思っていため、仕事の合間に送り迎えをしてでも諸行事を経験させてきた。親として「子どものために」と思ってやっていたが、これは子どもにとって苦痛でしかなかったことが後で分かった。

「不登校は怠けているのではなく、子どもが悩んでいる状態である」

（２）子どもが不登校を経験した保護者として

○　不登校は多様な視野で考える。
○　不登校時に大切なことは、子どもの声や心に寄り添うことである。
○　日々を安心して過ごせる環境（心理的安全性）が大切である。
○　子どもが「どの状態」にあるのかを捉えることで、関わり方に違いが生じてくる。

講演・演習　「親子が互いに育ち合う関係づくりを」
～心と言葉のキャッチボール～
親業訓練シニアインストラクター　　大屋　弘子　様

（１）親業とは

P･E･T（Parent Effectiveness Training「ユニバーサル・スキル（普遍的な技能）」
・　米国の臨床心理学者トマス・ゴードン博士が 1962 年に創設
・　ゴードン・メソッド　　・　全世界50カ国に広まっている　　・　すべての人間関係の構築に有効

（２）家庭教育とは

○　親や保護者が日常より、子どもに自立を促すよう意志を持って関わる。
＊規則正しい生活習慣・食育　　＊言葉を惜しまない
＊心の通い合うコミュニケーション　（・自己肯定感　・自己決定能力　・共感能力　⇒「生きる力」）

（３）子どもの心を開く聞き方（受容性・共感性・真実性）　【演習を行うことで確認】

○　基本姿勢（共にいる　・　沈黙　・　あいづち　・　うながす）
加えて「能動的な聞き方」を意識
ア　繰り返す　イ　言い換える　ウ　気持ちをくむ

⇒

＜効果＞
自己肯定感が育まれる
自己決定能力が磨かれる

子ども自身が問題解決に向かえるように親は「聞く」ことで支援（過程志向型）

参加者の声

○　過去に不登校の子を持った経験のある方の話だったので説得力があり、とても参考になった。貴重な体験であった。

○　今後の子どもとの向き合い方に自信が持てた気がする。

○　不登校の子どもからは、「学校に行けない自分はダメなんだ」と同じような反応が返ってくる。ゆっくり寄り添いながら支援したい。

○　今までは「不登校＝かわいそう、悪いこと」という意識がまだ少しあった気がする。お話を聴き、何も悪いことではないと気持ちが楽になった。

○　不登校に対する認識を変えていく必要があると感じた。先生方が一人一人の子どもたちとゆっくり話せる時間を確保することが大切であることを深く考えさせられた。

○　子どもたちの声を聴き、肯定の「わたしメッセージ」で伝えられるようにスイッチを意識していきたい。「大人だって聴いてほしい」と思った。

○　子どもも自分自身も大切にする関係づくり（コミュニケーション）、実践するためには繰り返すことが大切。どうしても自分の価値観を押しつけてしまったり、時には否定してしまったり、子どもは嫌な思いをしていたのだろうと思った。

○　実際に演習をやってみて言葉の使い方で、こんなにも気持ちが変わってしまうことを体験した。自分の気持ちを表現することは、自分自身を大切にすることでもあることを知り驚いた。

○　子どもの姿をよく見て、問題が何なのかを、誰が困っているのかを正しく判断し、コミュニケーションを取っていくことの大切さを知った。